

紀要創刊号の刊行にあたって

立命館大学スポーツ健康科学総合研究所長

伊坂 忠夫

2050年には、100歳を超える百寿者が約50万人になると推計されている。そのときの日本の人口は今より約2千万人減少して1億人とされているため、人口構成比からみれば5%を百寿者が占めるようになり、人生百年時代に着実に向かっているといっても過言ではない。その一方で、社会全体に対してこれからの少子高齢化、労働人口の減少、医療費、社会保障費の問題などの課題への取り組みがより強く求められるようになっている。

上述の課題の解決に向け、また新しい社会の方向性として、Society5.0が提唱されてきている。これは「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムを用いて、経済発展と社会的課題の解決を両立する新たな未来社会」と定義されている。その実現に向けたこの間の技術革新、ならびに情報システムの発展はめざましく、ロボティクス、AI（Artificial Intelligence）、ビッグデータ、ICT（Information and Communication Technology）などの活用は急速に進み、日常生活ならびに社会システムにも大きな変革をもたらしてきている。これらの変革は人々の志向や行動、価値観にも影響を与えている。

SDGs（持続可能な開発目標）の目標3は「すべての人に健康と福祉を（Good Health and Well-being）」であり、健康とWell-beingがこれからの持続性を担保する目標として示されている。立命館学園が2030年に達成すべき目標を設定した中期計画、R2030の中で、立命館大学は社会共生価値の創出を通じて次世代研究大学となることを掲げている。その社会共生価値の一つとしてWell-being（心身ともに健康で幸福な状態）の実現に向けた研究は、これまで本学が蓄積してきた研究実績、研究者、研究施設、ネットワークなどの特長を活かして大きく展開できるものであり、本研究所がその中心的な拠点を担うものである。

本研究所の設立の源流は約20年前にさかのぼる。第1期科学技術基本計画が策定された1996年、立命館大学理工学部にはロボティクス学科が設置された。本学のロボティクス学科は、日本で初めてロボティクスを冠した学科として、既に産業で活用されていたロボット技術をさらに発展させるとともに、ロボット技術を各方面へ応用することも含めて、最先端のロボット研究、人材育成の拠点として設置された。このときに集まった人間計測、スポーツ用具・装具の開発、センサー技術を扱う研究者などが中心となり、スポーツ産業研究センターが2001年に立ち上がった。

2010年にはスポーツ健康科学部・大学院同研究科が同じキャンパス（びわこ・くさつキャンパス）に設置されたことで、スポーツ健康科学分野における優れた研究者がさらに集積し充実したため、スポーツ産業研究センターからスポーツ健康科学研究センターへと改組（2012年）した。このセンターは、既存の学部・研究科ならびに研究分野を超えた研究拠点形成において中心的な役割を担い、翌年の2013年にはCOIプログラム（JST）の中核拠点に採択されるに至った。このCOIプログラムでは、本学内での学際的な連携に加えて、他大学、企業との共同研究も活発に展開され、大学で研究開発された研究シーズを、連携企業を通じて事業化、社会実装することができ、研究開発から社会実装まで一貫通貫できるプロセスを成果として蓄積することができた。

2つの研究センターでの約20年間、ならびにCOIプログラムでの実績、成果により、2022年4月に常置研究機関として本研究所、「スポーツ健康科学総合研究所」が設置された。スポーツ健康科学分野を筆頭に、脳神経科学、理工学、情報科学、薬学、生命科学、心理学、人間科学、経済学、経

営学、食科学等、幅広い分野の研究者120名以上が所属している。研究所のミッションは、Well-beingの実現を目指して、あらゆる人の身体的・精神的・社会的健康の実現に主体的に取り組み、多様性と包摂性に優れ、誰もが健康な生活を送ることのできる社会を実現することである。そのために、3つの研究ターゲット「健康・長寿の実現」、「スポーツを通じたQOLの向上」、「まち・社会の健康の実現」を設定し、あらゆる分野の研究者を連携・糾合し、産学官地の多様なステークホルダーとの学際共創研究により、基礎研究から、開発・実証、社会実装のイノベーションサイクルを構築して一貫通貫で推進する体制を整えている。

そのため、この研究所は基礎研究のみに閉じた研究所ではなく、Well-beingの実現を図るために、研究者のみならず、学術以外の産官民などの参加者と共に科学と実践を同時に進行することで、開発・実証、そして社会実装へとつなげ、この一連のイノベーションサイクルから、新たな科学的洞察と実践的な社会的利益の両方を創出していく。このプロセスの中で、所属する組織、専門領域の枠を超えて、多様な「知」が集う「総合知」の活用を大切に考えている。このようなことを具体的に実践できる学際共創のプラットフォームとして、「アクティブライフ共創コンソーシアム」を、スポーツ健康科学総合研究所ならびに連携機関、企業、関係者とともに2022年10月に開設した。今後、学際共創研究の進展に向けては、そのプロセスならびに創造された新しい価値において、参加者それぞれがメリットを十分に持てるようにすること、同時に次世代を担う若い方々がその実感を味わえるようにすることが大事であると考えている。

研究所のミッションであるWell-beingの実現に向けた研究遂行にあたっては、それぞれの研究成果を持ち寄り、議論討論を重ねてさらに継続的に発展させる必要がある。本研究所の活動を見える化し、内外に広く示す機能としての役割を果たすのが紀要である。この創刊号を発刊できたことを研究所としての第一歩として今後ともしっかりと歩みを進め、これからの未来に向けて活力ある持続社会を切り拓き、発展させるために、貢献できること、取り組めることを所員一丸となって邁進する所存である。

本紀要にて研究所の活動内容ならびに研究成果をご覧いただき、批判、提言、企画、アイデアも含めて多様なご意見を頂戴できることを願っている。

最後になるが、研究所の設置、これまでの活動、紀要の発刊にあたりご協力、ご尽力頂いた皆さんに心より感謝申し上げます。